

# 私の駆け出し時代

公認会計士試験「不合格」のシヨックも持ち前の「楽道家」で乗り切りました



渡辺俊之 わたなべ としゆき  
税理士法人優和理事長

1944年埼玉県生まれ。68年早稲田大学商学部卒。71年監査法人千代田事務所入所。75年渡辺俊之公認会計士事務所設立。84年優和公認会計士共同事務所設立に参画、同理事長。日本公認会計士協会理事・常務理事、同東京会・公益法人特別委員会委員長などを歴任。前田建設工業社外監査役、港区包括外部監査人兼務。

選抜されたのです。主宰する染谷恭次郎先生は、わが国会計学の大家と呼ばれ、後に国際会計研究会の発起人かつ初代会長を務められた「雲の上の人」。もちろんゼミに通える学生は成績上位者のみという、極めて狭き門でした。

しかしその年から成績至上主義を改め、間口を少々広くしたのです。そして成績的には思わしくなかった私もゼミへの参加を許されたのです。

ところがいざゼミに来てみると、同級生はいずれも秀才ばかり。4年生になると都市銀行や大手一流企業からの内定を次々にもぎ取っていききました。

一方私は惨憺たるさまで、気に入った企業からの内定などさっぱり。しかし潜在意識の中に「どうせ俺は公認会計士を目指すのさ」という変な余裕があり、これに根っからの楽天的な性格がミックスして、「どうにかなるさ」と、就職にはあまり慌てませんでした。

ただし、さすがに卒業証書を受け取ると「本腰入れて会計の勉強をしなれば」とスイッチが入りました。そして同じく会計士を目指す親友と2人で「合宿」とばかりに湯河原温泉(神奈川

んだ、というおぼろげながらの志を抱いていたからです。

大学3年生の1966(昭和41)年ともなると、わが学園でも徐々に大学紛争で騒がしくなりました。私は「ノンポリ」を通した口ですが、友人の中には闘志を燃やす者も少なくありません。

こうした中、旧態依然とした大学の姿勢にも転機が訪れたのでしようか、その恩恵は私にいきなり降り掛かってきたのです。憧れだった「染谷ゼミ」に

## 大学卒業後に会計士目指し温泉地で1カ月缶詰の猛勉強

父は税務署勤めで母とは職場結婚、おまけに父の妹、つまり叔母さんの夫は父の同僚という環境に育ったわけですから、幼い頃から「会計士」になるのは必然的だったのでしょうか。自分も帳簿を見たり細かな計算をしたりするのは嫌いではなく、早稲田大学商学部に進んだのも、将来は公認会計士になる

県)にある、1泊5000円の安旅館の一室を1カ月間借り切り、来るべき公認

会計士試験に向けて「缶詰」となったのです。68(昭和43)年の春のことでした。ところが翌69(昭和44)年に満を持して臨んだ試験は、まさかの不合格。多少自信があっただけに、このときばかりはシヨックでした。

しかしいつまでもよくよくよしていても埒が開きません。翌年のリベンジを懸けて「完全浪人」を決意したのです。幸いこの頃父は会計事務所を旗揚げしていたので、平日ここでアルバイトをすれば、会計の勉強にも役立ち、加えて

いくばくかのお小遣いも頂けます。そして土日はひたすら勉強。その甲斐あってか70(昭和45)年、公認会計士2次試験に合格。こうして会計の世界を歩み始めたのです。



1970年8月、会計士受験時代の仲間と山梨県の山中湖畔にて(上段左が本人)

## 会計事務所は「新婚旅行後いきなり1カ月午前様」の超ハード

2次試験に受かった私は、翌71(昭和46)年、東京の有楽町駅の前にある「監査法人千代田事務所」の門をくぐりました。当時は「監査法人」のまさに勃興期。65(昭和40)年に空前の粉飾事件「山陽特殊製鋼事件」が起こったのを契機に、上場企業に対する組織的監査の必要性が叫ばれ、67(昭和42)年に監査法人制度が制定、これに基づき監査法人がいくつも設立されたのです。

千代田事務所もまさに「出来立てホヤホヤ」で、辣腕の公認会計士7人が集って監査法人を設立、それぞれのボスが上場企業6、7社をクライアントとして抱え、奔走していました。

どれだけ忙しかったかの好例として、こんなエピソードがあります。

同事務所に入所して1年後、私は現在の妻と結婚し、新婚旅行としてハワイに飛び立ったのです。ここまではよくある「ハネムーン」の光景です。ただし、帰国した翌週からほぼ1カ月間「午前様」の状態。これにはさすがの妻もあきれかえり、泣きが入りました。

実はこのとき、クライアントだった精密機械関連企業が倒産、しかもどうやら経理に不正の疑惑が持ち上がったのです。このため私は上司や先輩らとともに、膨大な会計資料や簿外振り出しの支払手形、各種証憑などをシラムシラムに調べあげ、「不正」のカラクリを探し続けたのです。まさに不正解明とその証拠固めで、まるで地検特捜部のようでした。「監査法人」の存在意義は、まさに「正当な会計処理の監査」ですから当然ですが、当時まだ20代半ばで「新婚」の私にとっては、仕事は面白い反面、早く家にも帰りたいという

二律背反で複雑な心境でした。その後74(昭和49)年に公認会計士3次試験にパスし、翌年千代田事務所を退職、自宅を事務所に着けて「渡辺俊之公認会計士事務所」を旗揚げし、独立のスタートを切ったのです。ちょうど30歳の時でした。

当時を振り返ると好奇心旺盛で、チャレンジ精神に富んだ「若造」だったのでしょう。しかし理解ある恩師や上司、先輩に恵まれ、人と人との縁を引き立てていただいたことは、何よりの幸せだったと言えるでしょう。